325
527

始

般若心經注解

325-547

例言

一、本會は石川舜台師に請ふて般若心經の講義をなす、余は其の參考として此本を和譯し之を會員諸君に贈呈す

一、本書は石川師の校閲並に注釋を請へり

一、本書の卷尾に讀者の便利の爲め科文の索引を付す

一、本書の元本は山城宇治の興聖寺圓耳禪師著にて慶長十一年の出版なり、會員藤田子爵

儀君の所藏に係る

一、會員西島義平、岸加市、戸水吉平三君は印刷料を補助せらる記して好意を謝す

大正 6. 9.
内交

大正六年八月十八日

佛心會員

戸水萬頃誌

般若心經注解科文

此經を科して二と爲す いろ

(い) 初には題目

(ろ) 次には本文

本文の中に二 甲乙

(甲) 初には經家へ行に據て標起するに又四 1 2 3 4

(乙) 次には菩薩の利他の正說に二AB

(1) 初には能觀の人　觀自

(2) 次に所修の觀　行深

(3) 三に所觀の境　照見

(4) 四に所破の障　度一

(A) 初には顯說般若に二 子丑

(B) 次には密說般若に二 乾坤

(子) 初には五蘊に約して略して明すに二 上下

(丑) 次には諸法に歷て廣く示すに四 一二三四

(上) 初に色に約して廣く明す　舍利

(下) 次に餘の四蘊を例す　受想

(一) 初に法體を顯す　舍利

(二) 次に所離を明すに四 天地玄黃

(三) 三に所得を辨ずることを明すに二 大小

(四) 四に勝能を歎するを明して結前生後するに二 日月

(天) 初に空に三科なきを明すに三 いろは　無無

(地) 次に空に因緣なきを明す　無苦

(玄) 三に空に四諦なきを明す　無智

(黃) 四に空に境智なきを明す

(い) 初に空に五蘊なきを明す　是故

(ろ) 次に空に十二處なきを明す　無眼

(は) 三に空に十八界なきを明す　無眼

(大) 初に前を牒して後を起す　以無

(小) 次に正しく所得を明すに二 甲乙

(甲) 初に分眞斷果を明すに二 1 2

(乙) 次に究竟の智果を明すに二 A B

(1) 初に人の法に依るを擧ぐ　菩提

(2) 次に障を斷して果を得るに二 子丑

(子) 初に斷障　心無

(丑) 次に得果　究竟

(A) 初に人の法に依るを擧ぐ　三世

(B) 次に正しく得果を明す　得阿

(日) 初に別歎　故知
(月) 次に總歎　能除
(乾) 初に標章　故說
(坤) 次に正呪　羯諦

般若心經注解

舜台云是書解釋簡易般若初入ノ人ヲシテ便宜ヲ得セシムルコト多シ若夫備ランコトヲ一人ニ求ルハ不可ナリ

此經を科るに二と爲す

初には題目

(い) 摩訶般若波羅蜜多心經　總して此の經に七本の異譯あり。舜台云七本ノ異譯

ト云ハ何ヲ指スカ知ルヘカラス吾人ノ知ル所ヲ以スレハ一羅什譯摩訶般若波羅蜜大明呪經二玄奘譯摩訶般若波羅蜜多心經以上二本ハ同本異譯ナルコト疑フノ餘地ナシ以下ノ六本ハ原本前二本ト同シカラサル者ノ如シ何トナレハ以下六本ハ並ニ序正流ノ三分アリ前二本ハ正宗分ノミニシテ序流ナシ故ニ六本ヲ以テ異本トス若孤山ノ說ノ如ク譯家簡ヲ尙ヒ之ヲ省クトセハ同本ノミ三ハ般若共利言譯般若波羅蜜多心經四ハ唐ノ法月重譯普遍智藏般若波羅蜜多心經五ハ唐ノ智慧輪譯般若波羅蜜多心經以上五本ハ親ク讀ム所ニ屬ス以下三本ハ錢謙益ノ心經畧疏小鈔ニ載ル所ナリ一唐三藏大廣智不空譯般若波羅蜜多心經二宋三藏慈賢譯般若波羅蜜多心經三宋三藏施護譯聖佛母般若波羅蜜多心經以上八本ナリ猶義淨三藏譯本アリト云フ若在ラハ九本ナリ

此の本は玄奘所譯の經なり。唯正宗のみあつて序及ひ流通なし。法月の譯本に云く。法月ノ譯經稍出入アリ今之ヲ出ス如是我聞、一時佛、在王舍大城靈鷲山中、與大比丘衆、滿百千人、菩薩摩訶薩、七万七千人俱、其名曰、觀世音菩薩、文殊師利菩薩、彌勒菩薩、以爲上首、皆得三昧總持、住不思議解脫、爾時觀自在菩薩摩訶薩、在彼數坐、於其衆中、即從座起、詣世尊所、而向合掌、曲躬恭敬、瞻仰尊顏、而白佛言、世尊我欲於此會中、說諸菩薩、普遍智藏般若波羅蜜多心、唯願世尊、聽我所說、爲諸菩薩、宣秘法要、爾時世尊、以妙梵音、告觀自在菩薩摩訶薩。言、善哉善哉ノ具大悲者、聽汝所說、與諸衆生、作大光明、於是觀自在菩薩摩訶薩、蒙佛聽許、佛所護念、入於慧光三昧

正受、入此定已、以三昧力、行深般若波羅蜜多時、照見五蘊自性皆空、ト此經前ニ列衆ニ觀世音ト云ヒ後觀自在ト云フ何ノ意ナルヲ知ラス　王舍城耆闍崛山に於て。觀世音菩薩。佛に白して云く世尊我れ此の衆中に於て般若波羅蜜多心を宣說せんと欲す唯願は世尊我か所說を聽たまへと。爾の時に世尊。觀世音菩薩に告て云く。善ひ哉善ひ哉。具大悲者汝か宣說せんことを聽す。是に於て觀世音菩薩。佛の聽許を蒙り。惠光三昧に入り。彼の三昧より起て。舍利弗に告て之を說く。智慧輪論譯經同之ト云フモノ論ハ衍字ナルヘシ同之ト云フモ大局ノ同一ナルハ諸本同ナリ出入增減若クハ說聽ノ異同等ニ至リテハ單ニ同之ト云フヲ得ズ智慧輪本菩薩ノ名ヲ觀世音自在菩薩ト云フ舊新兩譯ヲ合シタルハ他ニ例ナシ一異ナリ菩薩行深般若行照見五蘊皆空ノ後ニ至リテ舍利子合掌恭敬シテ觀世音自在菩薩ニ甚深般若ノ行ヲ學ント請フ菩薩是ニ於テ行甚深般若波羅蜜多時ノ照見五蘊皆空ヲ說ク二異也法月譯ハ慧光三昧ニ入ル者ハ觀自在ナリ智慧輪譯ハ廣大甚深三摩地ニ入ル者ハ釋迦佛ナリ三異ナリ流通ニ至リテ智慧輪譯ハ爾時世尊從三摩地安詳而起讚觀世音自在菩薩摩訶薩善哉〻〻等ト說テ流通ハ全ク佛ノ流通也法月譯ハ佛ノ自說ナキニ拘ラス佛說是經已諸比丘及菩薩一切衆世間天人阿脩羅乾闥婆等聞佛所說皆大歡喜信受奉行ト云フ佛說ナクシテ說是經已ト云ヒ信受奉行ト云ヒ正宗分中若クハ流通ニ入リテ脫文アルニ依ルナラン是四異ナリ此ノ如キ單ニ同之トハ云ヒカタシ　摩訶とは梵語。此には飜して大と爲す。凡夫六塵に執して。心世間に着す故に隔礙と名く。舜台云慧忠ハ名クト云ハス爲スト云フ名クハ筆耕者ノ誤ナラン　之を名けて小と爲す。又云小ト爲ス以上慧忠摩訶ノ解　今忘念を破して。六塵に着せす。心境空なりと悟りぬれは心量廣大にして。舜台云事實此ノ如シ確々切々　猶ほ虛空の如し。邊畔あることなく。亦た方圓大小なく。亦た青黃赤白にあらす亦た嗔なく喜なく。是なく非なく善なく惡なく。頭尾あることなく。舜台云道隆蘭溪本經注曰可憐生外ニ向テ求ム眉毛本ト眼上ニ在　一法の得可きあることなし。之を名て大と爲す。般若とは梵語。此には飜して智惠と爲す。凡夫妄に本心に背て堅く我見を執す。舜台云我見ヲ執ス是見取ナリ之ヲ愚癡ト名クルハ非ナリ蘭溪曰我即愚癡全體也ト今注之ヲ學フカ如キモ其距離遠シ　是を愚痴と名く。今愚痴を破して本來無我なりと悟る之を名て智惠と爲す。舜台云無我ハ二空ノ中ノ我空ナリ未タ法空ヲ了セス之ヲ慧トスルハ速了セリ無我一向ヲ刪去ラハ可也　波羅蜜多とは梵語。此には到彼岸と云ふ。本心に迷て生死に居するを此岸と曰ふ。本心を悟て心体不生不滅に到るを彼岸と曰ふ。心とは大智惠到彼岸の心なり。此の心は人々具足して天眞の自性なり。經とは法に訓し常に訓す。法は則ち群機の軌とる處。常は則ち百世易らさるなり。

次本文に二（ろ）

初には經家行に據て標起するに又四（甲）

初には能觀の人（1）觀自在菩薩　能く般若を脩する菩薩の名なり。舜台云慧忠觀音ヲ以テ直ニ自下ノ心象ト爲ス是亦可也然レトモ是般若至富ノ解ト云ヒカタシ孤山智圓云觀ハ即能照ノ智ナリ世ハ即所照ノ境ナリ音ハ即所救ノ機ナリ其音聲ヲ觀シテ解脫ヲ得セシムルカ故ナリ新ニ觀自在ト云フ理ヲ觀シ機ヲ觀シ悉ク自在也觀理ハ則三諦圓

照縱ナラス横ナラス觀機ハ則十界等ク化ス前ナク後ナシト此解ヲ妥當トス科ニ能觀ノ人ト科セリ宜ク人ヲ以テ解スヘシ

唯諸法を觀して法に拘ることを被て自在を得さるを破す。今悟心無心と悟り。境無境と了て。心境兩つなから亡し。了として了すへきなく。坦然として無礙なり故に自在と名く。私に曰く法縛を被むる是れ觀不自在なり。謂く法は是れ無念なりと聞て。百物思はす。念をして絶せしむ。是れ法縛なり。舜台云解シ得テ可ナリ今法縛を離れて。法に自在を得。是れ觀自在なり。謂く法は是れ無念なりと悟て一切の法を見て。心染着せさる。是を無念と爲す。本心六根より。六塵の中に走出して。染なく着なく。來去自由なるは。是れ觀自在なり。菩薩とは。菩は謂く菩提。此には覺と云ふ。上菩提を求るか故に。薩は謂く薩埵。此には衆生と云ふ。下も衆生を救ふか故。所以に境に從て名を得るなり。慧忠の云く。菩の言は了。薩の言は見。舜台云菩薩ヲ了見トス何ノ據ヲ知ラス諸法本來空寂なりと了見す。故に菩薩と名くなり。

次に所脩の觀 (2) 行深般若波羅蜜多時 行とは般若無相行の行なり。舜台云般若實ハ有相無相ヲ

觀セス今無相行ト云フ是桐業封第ナリ所謂止啼錢ノミ謂く無行を以て行と爲すなり。若し行相の心を起せは。舜台云無行相ノ心ヲ起スモ亦般若ニ達ス故ニ費隱云之ヲ有相ニ求レハ有相無也之ヲ無相ニ求レハ無相無也實ニ電光石火タリ擬議ヲ容ルヽナシ直得ニ深ノ又深ナリ深ハ猶相ノ如シ徹ノ又徹ナリ徹ハ猶名ノ如シ非名非相ニシテ能ク闡提惡性ヲシテ之ヲ見テ大火聚ノ四邊能ク入ルコト莫キカ如クナラシム能ク大乘眞子ヲシテ之ヲ見テ清涼地ノ四門皆入ルヘキノ如クナラシムト此裏光景眞是馬觸馬斬人觸人般若無相に相違す。般若經に曰く。般若は火炎の如し四邊より取るへからす。取れは即ち手を燒く。古德曰く。道の体は本修なし。脩せされは自ら道に稱ふ。若し脩道の心を起せは。此の人道に稱はす。深般若波羅蜜多とは。此は心外に法を求むるを破す。小乘の人自心本來具足と悟らす安りに言教を求めて。以て智惠と爲し。名て般若と爲し。妄りに心念を息めて不生不滅を求るを名て波羅蜜と爲す。是を淺般若と名く。今更に深般若を行することを擧て以て大乘を明し前病を對破す。菩薩心本來空寂なりと了見するを。名て般若と爲し。心本來不生不滅なりと了見するを。名て到彼岸と爲す。是を深般若波羅蜜多と名く。時とは菩薩般若を脩行する時なり。惠忠の云く。時とは過去現在未來の心。舜台云解シ得テ妙這裏光景正ニ是深般若波羅蜜ナリ費隱云時ハ乃チ能所雙亡智理俱泯ノ時ナリト能ト智トハ行ナリ所ト理トハ深般若波羅蜜多ナリ此時前際ナク後際ナク現在ナシ亦忠ト同シ俱に不可得なり故に名て時と爲す。

照見五蘊皆空

照は觀なり。謂く本心に住して照見なきを照見と曰ふ。舜台云蘭溪照見ハ返照也境緣ニ染セス退歩見性ス般若ノ眞空ヲ返照スルヲ謂フ也トス菩提本非樹所見宜ク此ノ如クナルヘシ若し照見の心を起せは。法に差別を成し。般若無相に背く。豈に五蘊の空を顯さんや。楞嚴に曰く。自心自心を分別すれは。非幻も幻法と成ると。已上本心に住すれは五蘊の幻法。天眞自爾として。般若眞空と開發す。五蘊とは。色受想行識なり。色を合して一と爲す。心を開して四と爲す。亦た四心の中に。受想行は心所。識は心王なり。色は謂く眼耳鼻舌身。色聲香味觸。無表色なり。此の十一種を名て色蘊と爲す。受は謂く苦樂捨の三を領納するを受蘊と爲す。想は謂く苦樂怨親。男女等の像を執取するを名て想蘊と爲す。行は謂く心所に四十六あり。受想の二を除く。餘の四十四。及ひ十四の不相應。此の五十八法。總して行蘊と名く。造作遷流の二義を行と名く。此の義邊に據らは色等の五蘊。俱に行と名くへし。謂く行蘊。法を攝すること多に由るか故に偏に行の名を得たり。識は謂く了別を識と名く。此に六種の了別不同あり。謂く初眼識は色を了し。乃至意識は法を了す是を識蘊と名く蘊とは積聚を義と爲す所有の色を一聚と爲して色蘊を名け乃

至所有の識を一聚と爲して識蘊と名く。皆空とは般若眞空なり。謂く凡夫の妄情。我及ひ一切の法に於て。周遍計度して。一一に執して實有と爲す。痴孩の鏡中に人の面像を見て執して實有と爲するか如し是を偏計所執と云ふ所執の法依他の衆緣相ひ因て起り。都て自性なし。唯是れ虛相にして。鏡中の影の如し。是を依他起性と云ふ。本覺眞心。始覺顯現し。圓滿成就眞實常住なれは。鏡の明の如し。是を圓成實性と云ふ。今皆空と言ふは。諸法の相を離れて。其の体空に似り。故に且く空と云ふ實に有と云ふへからす。空と云ふへからす。其の体不思議なり。此の理を賞了するに。心を以て心外を覺すへからす。亦た心を以て自己を覺すへからす。其の体即ち是なり。舜台云是六祖門下ノ所謂一宿覺ナル者名ハ玄覺永嘉集ノ著アリ眞覺禪師ト云フ永嘉大師云く。若し知を以て寂を知る。此れ無緣の知にあらす。手に如意を執る。如意のなき手にあらす。若し自知を以て知る。亦た無緣の知にあらす。手自ら拳を作す如き。是れ拳ならさる手にあらす。亦た知を以て寂を知るにあらす。亦た自知を以て知るにあらす。無知と爲すへからす。性了然たるを以ての故に。木石に同しからす。手に物を執らす。亦た自ら拳を作さゝるか無手となさゝる如

き。手安然たるを以ての故に。兎角に同しからす。

四所破の障 (4) 度一切苦厄 度は度脫なり。一切苦厄といふは。內本來空寂にして。實に纖毫の得へきなきを了すれは。外に分段變易の二種生死を脫る。厄は災なり困なり以上の一段。阿難法藏を結集する時。觀自在菩薩の。度生の功行を叙述す。此は是れ別序なり。下の段舍利子より去て。觀自在菩薩。舍利子の所問に答ふるなり。

次に菩薩の利他正說に二

初には顯說般若二 (A)

次には密說般若二 (B)

初五蘊に約して畧して明す二 (子)

初色に約して廣く明す(上) 舍利子色不異空空不異色色即是空空即是色

孤山云く正說分に顯了般若。秘密般若あり。此の二者ある所以は機の不同に隨へはなり。或は顯を聞て歡喜し。或は密を聞て適悅し。善を生し惡を破し。理に入ること皆然り。故に知りぬ顯秘の談。俱に妙惠を發生せんか爲なり。問ふ秘密は解すへからす。

云何んか亦た惠を發せん。答ふ不可解の空と達すれは。是れ則ち能く惠を發す。故に大論に天子須菩提に謂ふ。說く所の般若。隱密にして知り難し。我れ解すること能はすと。而して須菩提答て不解も亦た空。是れ般若なりと云ふを引く。應に知るへし取着の心を以て誦すれは。顯了亦た只た福を增す。無相の心を以て誦すれは。秘密則ち能く惠を發す。舍利子とは梵には舍利弗と云ふ。舍利は身と鶖し。弗は子と鶖す。今二字は梵を存し。一字は華に從ふ。故に舍利子と云ふ。母好身の形なる故に。母を身と名く。身は子なる故。身子と名く。以上孤山ノ疏ナリ佛弟子の中。智惠第一なり。大衆の爲めに請問す。故に觀自在菩薩。其の名を呼て之れに告く。色不異空とは色の擧体を以て。全く是眞空即斷空にあらす故に色の擧体眞心の空に歸す。舞台云色ノ擧體眞空ニ歸スト云フハ妥ナラス 斷滅の空に歸す合からす。舞台云所變能變ハ識ニ於テ謂フヘシ用語不妥 本と斷空の所變にあらさるを以ての故。斷空は則ち是れ虛豁斷絕して。知なく用なけれは。萬法を現すること能はす。鏡外の空の。鏡內の空に同しきにあらさるか如し。色相宛然として求むるに不可得なり。之を空と謂ふ。空不異色とは眞空は必す色に異ならす。故空不異色と云ふ。何を以ての故に凡そ

是れ眞空は。必す色に異ならす。是無相の理は斷滅にあらさるを以ての故に。是の故に是れ空即是色なり。若し事を離て空理を求は。即ち斷滅を成さん。今事に即して眞空の理を明す。事を離て何そ理あらんや。眞如自性を守らす。（舜台云眞如自性ヲ守ラサルハ流轉門ナリ之ヲ談スルハ法性宗ナリ眞如凝然不作諸法ハ法相大乘ナリ大乘中ノ別アルコト初學意ヲ用フヘキ也）緣に隨へ諸の事法と成るを以て。則ち空を擧るに全く色。理を擧くに全く事なり。色即是空空即是色とは。空色無礙を云ふ。謂く色の擧体全く是れ空。空の擧体全く是れ色。故に色を看るに空を見すと云ふなく。空を觀るに色を見るにあらすと云ふことなし。無障無礙。一味の法と爲すなり。衆波を擧くるに全く是れ一水。一水を擧るに全是れ衆波にして波水礙さるか如し。寶藏論に云く。空の空たるへきは眞空にあらす。色の色たるへきは眞色にあらす。眞色は形なく。眞空は名なし。無名は名の父。無色は色の母。萬物の根源と爲り。天地の太祖と作る。

次餘の四蘊を例す（下）受想行識亦復如是　餘の四蘊を例す

次諸法を歴て廣く示すに四

初法体を顯す（一）舍利子。是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減

是諸法とは。五蘊幷に十二入等の一切諸法を指すなり。空相とは眞空實相なり。心外の諸法。（舜台云心外ノ諸法ト云フ者般若ノ意ニ非ス諸法ノ相是心相也是眞空相也心外ニ諸法アリトセハ是大邪見也法相權大乘家モ猶許サヽル所況ヤ般若ヲヤ心外ノ諸法一句語弊アリ又按本書深般若波羅蜜多ヲ解シテ心外ニ法ヲ求ルヲ破スト云フ今何ソ心外ノ諸法ト云フヤ）眞空實相なりと了するにあらす。但自己本心空寂なりと了すれは。諸法自ら空寂なり。故に是諸法空相と曰ふなり。（舜台云諸法ハ波相ノ如ク空相ハ水相ノ如シ全ク一物ナリ故ニ諸法ハ空相ナリト云フ）不生不滅。不垢不淨。不增不減とは。自己の本心を了すれは。法々是れ心なり。（舜台云一網打盡）心に諸相なし。豈に生滅增減等あらんや。（舜台云然ルニ本經所說待對ノ法只此生滅垢淨增減ノ三語ノミ三語能ク心經ヲ含攝ス）

次所離を明す四（二）

初空に三科なきことを明すに自ら三（天）

初空に五蘊なきことを明す（い）是故空中無色無受想行識　五蘊は即色を合して一と爲し。心を開して四と爲す。具に上に注するか如し云々。

次空に十二處なきことを明す（ろ）無眼耳鼻舌身意無色聲香味觸法　十二處は。謂く六根六境なり。是心心所生長門の處なり。六識生することは必す根境に託して方に能く起るに由る。故に名て處と云ふ。處は即ち色を開して十色處半と爲す。

舞台云前ニ五蘊ヲ釋シテ十一トシ無表也ヲ一トセシ者茲ニ半トセリ半トスレハ無表色ハ色心二法ノ間ニ假立スルカ故ナリ故ニ色ニ於テ法處一分色ト名ツク

謂く眼耳鼻舌身。色聲香味觸を十處と爲す及ひ法處の一分なり。心を合して一心處半と爲す。謂く意處全。及ひ法處の一分なり。

三空に十八界なきことを明す（は）無眼界乃至無意識界十八界は。謂く六根六境六識なり。界は種族を義と爲す。此に兩釋あり。一には生本の義。謂く十八界。同類の因と爲て。各自類等流果を生す。故是れ法の生する本なり。又一相續に十八類の諸法の種族あるを。十八界と名く。界は即色心俱に開く。謂く色を開て十色界半と爲す。謂く眼耳鼻舌身。色聲香味觸を十界と爲す。及ひ法界の一分なり。心を開き七心界半と爲す。謂く眼識耳識鼻識舌識身識意識意根を七界と爲す。及ひ法界の一分なり。十八界の中に。始末の二界を擧て。中間の十六界を畧す。故に乃至と云ふなり。

次空に因緣なきことを明す（地）無無明亦無無明盡乃至無老死亦無老死盡

是れに生滅の十二因緣あり生を凡夫と爲し。滅を聖人と爲す。即ち緣覺所脩の觀あり。空に凡聖なきか故に。生滅俱に之れなし。生の十二因緣とは一には無明。二には行。三には識。四には名色。五には六處。六には觸。七は受。八は愛。九は取。十は有十一は生。十二には老死。初の無明とは。過去世に起す煩惱を。總て無明と名く。智惠あらす。所明なきか故に。次に行をは。過去世に起す諸業を。總して行と爲す業を名て行とすることは。造作の義なるか故に。三に識とは。母胎に於て正に生を結ふ時の。一刹那を識と名く。四に名色とは。生を結てより後。六處生する前。中間の色心を。摠して名色と稱す。舞台云字ハ即名ナリ名ハ心識ノ異名ナリ心は但字のみある故に名と云ふ。色は乃ち質礙の故に色と云ふ。五に六處とは名色より後。舞台云根境識ノ三和合スルハ觸以後ナリ三和より己前眼等の根を生し。識心の涉入する所なるか爲めに六處と名く此は是れ胎内五位の中鉢羅奢佉の位なり六に觸とは。胎を出て〻後。三兩歳より來。根境識の三。能く對觸あるを。總して名て觸と爲す。三受の境に於て。未た了知すること能はさるか故に。七に受とは。五六歳己去。十四十五己來。已に三受の差別の相を了し。未た婬貪を起さす。此の位を摠して受と爲す。八に愛とは。十五己去。妙資具を貪り。婬愛現行するを。摠て名て愛と爲す。九に取とは。取は謂く貪なり。年既に長大にして。五欲の境を貪り。四方に馳求して。勞倦を憚ら

さる總して名て取と爲す。十に有とは。馳求に因る故に。積集して能く當有の果を牽く業を。總して名て有と爲す。業を名て有と爲すことは。當果を有するか故に。十一に生とは。此れより命を捨て。正に當有を結ふを。總して生の名を立す。當來の生支。即ち今の識の如し。十二に老死とは。當來世に於て。受生已後。名色支あり。次に六處を生し。次に觸支を生し。次に受支を生す。此の四位を。總して老死と名く。是の老死の如き人は。即ち今世の名色。六處。觸。受。四支の如し。是れを三世兩重の。十二因緣と名く。過去の無明煩惱行業に依て現在の五果を感し。識名色六入觸受現在の三因愛取有に依て。六入ハ舊譯ナリ前ニ六處トセシハ新譯ナリ此狹注ハ誤記セシモノナルヘシ改テ處トスル方可然カ未來の兩果生老死を感す。是を生の十二因緣と名くなり。滅の十二因緣とは無明滅すれは即ち行滅し。行滅すれは即ち識滅す。乃至老死滅す。是を滅の十二因緣と名く。盡は滅なり。大乘の菩薩。本心の空を悟了すれは自然に生滅の因緣なきなり。

三空に四諦なきこと明す（玄）無ニ苦集滅道一モ　四諦とは。一には苦諦。二には集諦。三には滅諦。四には道諦。初の苦とは。區惱を義と爲す。即ち生死の苦果。一切有爲の法。無常に逼惱せらる。次に集とは。招集を義と爲す。謂く煩惱業聚集して。生死の果を招く。三に滅とは滅無を義と爲す。結業既に盡れは。則ち生死一切の患累なし。故に名て滅と爲す。四に道とは。能通を義と爲す正道助道。三十七品の惠行を。名て正道と爲し。種々の對治及び禪定を助道と爲す　此の三相扶て能く涅槃に通す。故に道と名く。諦とは。審實不虛の義なり。謂く苦は實に苦ならすと云ふことなし。乃至道は實に道ならすと云ふなし。苦集滅道と列ることは。苦集は世間の因果。滅道は出世の因果なり。而して皆な果を先にし。因を後にすることは。意苦を知て集を斷し。滅を慕て道を脩し。苦を離れ樂を得せ令めんと欲するなり。此れは聲聞所脩の觀なり。大乘の菩薩。本心を悟了すれは。自然に四諦の相なきなり

四空に境智なきことを明す（黄）無ニ智亦無ニ得一モ　忠云く。舜台云大般若六百卷建アリ破アリ雲ノ如ク興リ波ノ如ク湧ク幾百千ノ名相一層ヲ踏破スレハ一層ヲ生シ來ル玄奘西天ノ旅程ト雖此層々重疊スルニ比スヘカラス而シテ其究竟スル所ノ處無智無得ノミ般若ノ心ナル者唯此ニ在リ徹骨徹血生呑活剝スルヲ許サス諸法を推照して無所得なりと了す。之を名て智と爲す。諸法本と空なり。何んそ推照を仮らん。故に無

智と云ふ。自性清虛にして。實に一法の得へきなし。故に亦た無得と云ふなり。問ふ若し爾らは。斷滅に歸すへきや。答ふ爾らさるのみ。宗鏡鏡に曰く。或る人經に眞の般若は知なく見なく。作なく緣なしと云ふを聞て。便ち般若は太虛無情の流に同しと謂て。斷見に墮す。既に般若に乖く。論主(龍公般若無知論を作る)之を破す。故に云く世に無知と稱する者。謂く木石太虛無情の流なり。論に無知と題することは。聖心取相の知あることなきを明さんか爲めに。故に無知と云ふ。眞知なしと謂ふにはあらさるなり。何んとなれは般若の靈知。鑑として知らすと云ふことなし。太虛の一向無知なるには同しからさるなり。然れは則ち斷見無知に。略して明すに十一種あり。論の中に畧して三種を言ふ。十一種とは。一には太虛。一向空なる故。二は木石。謂く無情の故。聾瞽。謂く根不具にして見聞なきか故。此の上の三種は。是れ論の所破なり。四には愚痴。謂く智惠なく境に於て了せさる故。五は癲狂。惡鬼心を惑して。本性を失するか故。六は心亂。境多くして心を惑し。決斷する能はさる故。七は悶絕。心神闇黑にして死人の如くなる故。八は惛醉。藥の爲めに迷はる所となる故。九は睡眠。神識困熟する

故。十は無想定。外道惑に伏して。心想行せさる故。十一は滅盡定。二乘寂に住して。心智止滅する故。此上並に是れ惑倒にして。般若無知にあらさるなり。又云く若し心境是れ實人法空ならすと執すれは。徒に萬劫を經て脩行すとも。終に道果を證せす。若し頓に無我を了し。深く物虛に達すれ則ち能所俱に消す。何の證せさることかあらん。猶し微塵の猛吹に揚り。輕舸の迅流に隨ふか如し。只た恐くは一心を信せすして自ら艱阻を生することを。若し宗鏡に入れは。何くに往として從かはさらん。且く勇施菩薩の如きんは。婬欲を犯るに因て。尙ほ無生を悟り。性比丘尼の。心に脩行なきも。亦た道果を證す。何に況んや一乘の法を信解し。自心を諦了する。而も尅證なからんや。或は疑て云ふことあらん。豈煩惱を斷せさらんや。解して云く。但諦かに殺盜婬妄。一心の上より當處に起ること觀すれは便ち寂なり。何そ須く更に斷すへけん。是を以て但一心を了すれは。自然に萬法如幻なり

三所得を辨することを明すに二(三)

初に前を牒して後を起す(大)以(テノ)無(キヲ)所得故　以は用なり。即ち菩薩諸佛。前に明す

所の無所得の心を用て。智斷果を得るなり

次に正く所得を明すに二 (小)

初分眞斷果を明すに二 (甲)

初人の法に依ることを擧く (1) 菩提薩埵。依(カ)般若羅蜜多(ニ)故 菩提薩埵は。能依の人なり。依般若波羅蜜多故は。所依の法なり。謂く自己の本心。元と能所に離たり。若し能所あらは。即ち手を燒く。

次障を斷して果を得るに二 (2)

初には斷障 (子) 心無(シ)罣礙。無(キカ)罣礙故。無(シ)有(ルコト)恐怖。遠離一切顚倒夢想

般若の法門に依て。心に業縛なきことを得。故に心無罣礙と云ふ。業縛なきに依るか故。生死の恐怖なきを。無有恐怖と云ふ。既に生死の恐怖なければ。則ち顚倒煩惱なし。遠離一切顚倒夢想と云ふ。

次得果 (丑) 究竟涅槃(ス)(ヲ) 涅槃とは。梵語。具には摩訶般涅槃那と云ふ。華には大滅度と言ふ。大は即ち法身。滅は則ち解脫。度は即ち般若なり。謂く心本と邊畔を離たるは是れ大。心本と業障を離るゝは是れ滅。心本と痴闇を離るゝは是れ般若。此の三德。各別あるにあらす。一法の三義なり。此の本心の三德を悟了すれは。自然に三障如幻なり。忠の曰く。心若し生あらは。即ち滅すへきあらん。心本と生なければ。實に滅すへきなし。無生無滅を。名けて涅槃と爲す。究は窮なり。竟は盡なり。三世の塵勞妄念。本と生滅なし。故に究竟涅槃と云ふ。私に曰く。涅槃義飜に不生不滅と云ふ。忠師の意。義飜に隨て之を解す。

次究竟智果を明すに二

初人の法に依ることを擧く (A) 三世諸佛。依(リ)(ヨフ)般若波羅蜜多(ニ)故 三世の諸佛。無所得に達して。大道方に成す。

次正く得果を明す (B) 得(エヲ)阿耨多羅三藐三菩提(ヲ) 阿耨多羅。此には無上と云ふ。三藐此には正と云ふ。三此には等と云ふ。菩提此には覺と云ふ。謂く無上正等覺なり。自心本來是佛なりと覺すれは。一切の妄法を自覺了するに當る。故に正等覺と云ふ。此覺に過るものなし。故に無上と云ふのみ。

四勝能を歎することを明して結前生後するに二

初別歎（日）故知般若波羅蜜多。是大神咒。是大明咒。是無上咒。是無等等咒　故知といふは結前生後の語なり。佛菩薩般若に依て。菩提涅槃を得玉ふ。故に般若は是れ咒なり。咒を言ふとは。譬に約して歎するなり。諸の神佛。秘咒を得るを以ての故。轉變自在なり。佛菩薩。般若を行し玉ふか故。能く凡を轉して聖と成る。若し爾らは則ち顯說密說。咸く是れ咒の義なり。故に今歎する所。前の顯說を結して。後の密說を起す。四種の咒といふは。蓋し般若の功用を言ふ。本心を了すれは。自ら魔障を破するを。大神咒と名く。本心を了すれは。自ら痴闇を滅するを。大明咒と名く。本心を了すれは。極妙の理。之に過くるなし。故に無上咒と名く。本心を了すれは。萬法の源を極めて。齊等なる者のなきを。無等と名く。重て等と言ふは。此彼の法身等き故に等と云ふ。十地論に云く。無等とは謂く佛餘の衆生に比するに彼等しきにあらさる故。重て等と言ふは。此彼の法身等しき故にと云々

次摠歎（月）能除一切苦眞實不虛　般若の功用。廣大無邊にして。二死苦を除くこと決定して疑なし。

初標章（乾）故說般若波羅蜜多咒即說咒曰　文の如し

次正咒（坤）羯諦羯諦。波羅羯諦。波羅僧羯諦。菩提薩婆訶　是の咒に無飜有飜の兩義あり。無飜の義と言ふは。咒は是れ佛の密語。下凡の所知にあらす。法華疏に云く。咒は是れ鬼神王の名號。其の王の名を稱すれは。則ち部落主を敬ふ故能く一切の鬼魅を降伏す。縱ひ梵を譯して華と成すとも。人亦た曉らさるか故凡そ密語に當て例として皆飜せす。深く其の致を求むれは。只是れ前の般若無所得の心を密說するのみ。其れ猶ほ世人。典語を以て物を召ふに。庸俗得て而して知ることなし物豈に異あらんや。或は譯飜を作て。義を解すと言ふは。恐らく秘密の說に異す。今取ることなし。次に有飜の義と言ふは。忠の曰く羯諦羯諦とは。繫着を諦と名く。羯とは除なり。塵勞妄念。智惠をもつて蕩除す。故に羯諦と云ふ。又重て羯諦と言は。身を空に了するを云ふ。私に曰く本心を了すれは。自然に心身空寂と顯るゝを羯諦心空羯諦身空と云ふ。波羅羯諦とは心身本淸淨。何の妄念の除く可きかあらん。故波羅羯諦と云ふ。

波羅僧羯諦といふは。清淨は塵勞に對す。塵勞本來無ならは。清淨の名立せす。故に波羅僧羯諦と云ふ。菩提薩婆訶とは。菩提は是れ道。薩婆訶は是れ行。本性を悟達すれは。即ち是れ道行なり。菩提の言は了。薩婆訶の言は見。本心を了見するを菩提薩婆訶と云ふ。又菩提は是れ心。薩婆訶は是れ一切の法。一切の法本來是れ心なるか故に。菩提薩婆訶と云ふ。是の如きの神咒。直に本心を指す。心動靜なし。心を起して心を求むへからす。心生滅なし。心を將て心を滅すへからす。心は內外の中間にあらす。內外中間に向て求むへからす。心は一切處にあらす一切處に向て求むべからす。求るに不可得なるか故に。此の譯本に流通なし。般若三藏の譯經の末に曰く。爾時世尊。廣大甚深三摩地より起て。觀自在菩薩を讃て言く。善ひ哉善男子。是の如く汝か所說の如し。甚深般若波羅密多の行。應に是の如く行すへし。是の如く行する時。一切の如來。皆悉く隨喜し玉ふ。爾時に世尊是の語を說き已て。舍利子大喜充遍。觀自在菩薩も。亦た大に歡喜す。彼の衆會の天人阿脩羅等。皆大に歡喜し信受し奉行したてまつる。智惠輪論の譯經。亦た之に同し。

舞台云大般若經綱要云心經ハ神呪ヲ結ト作ス即顯即密ナリ而シテ般若ハ六波羅蜜分六會ノ說ヲ以テ全文ヲ收歸ス蓋眞言ヲ總持門ト爲ス而シテ六到岸又諸法ノ總持タリ義正ニ相等シト呪ノ總持タル呪ノ通義ナリ顯露諸說ヲ總持スルコト辯ヲ要セス六百卷大般若諸法名相爰ソ啻數百ノミナラン而シテ第十一會卷五百七十九ヨリ五百八十三ニ至ルヲ布施波羅密多分トシ第十二會五百八十四ヨリ五百八十八卷ニ至ルヲ淨戒波羅密多分トシ第十三會五百八十九卷ヲ安忍波羅密多分トシ第十四會五百九十卷ヲ精進波羅密多分トシ第十五會五百九十一卷五百九十二卷ヲ靜慮波羅密多分トシ第十六會五百九十三卷ヨリ第六百卷ニ至ルヲ般若波羅密多分トス是大般若全部諸法ノ名相ヲ六度ヲ以テ總持スルナリ咒ノ總持タル亦知ルヘシ

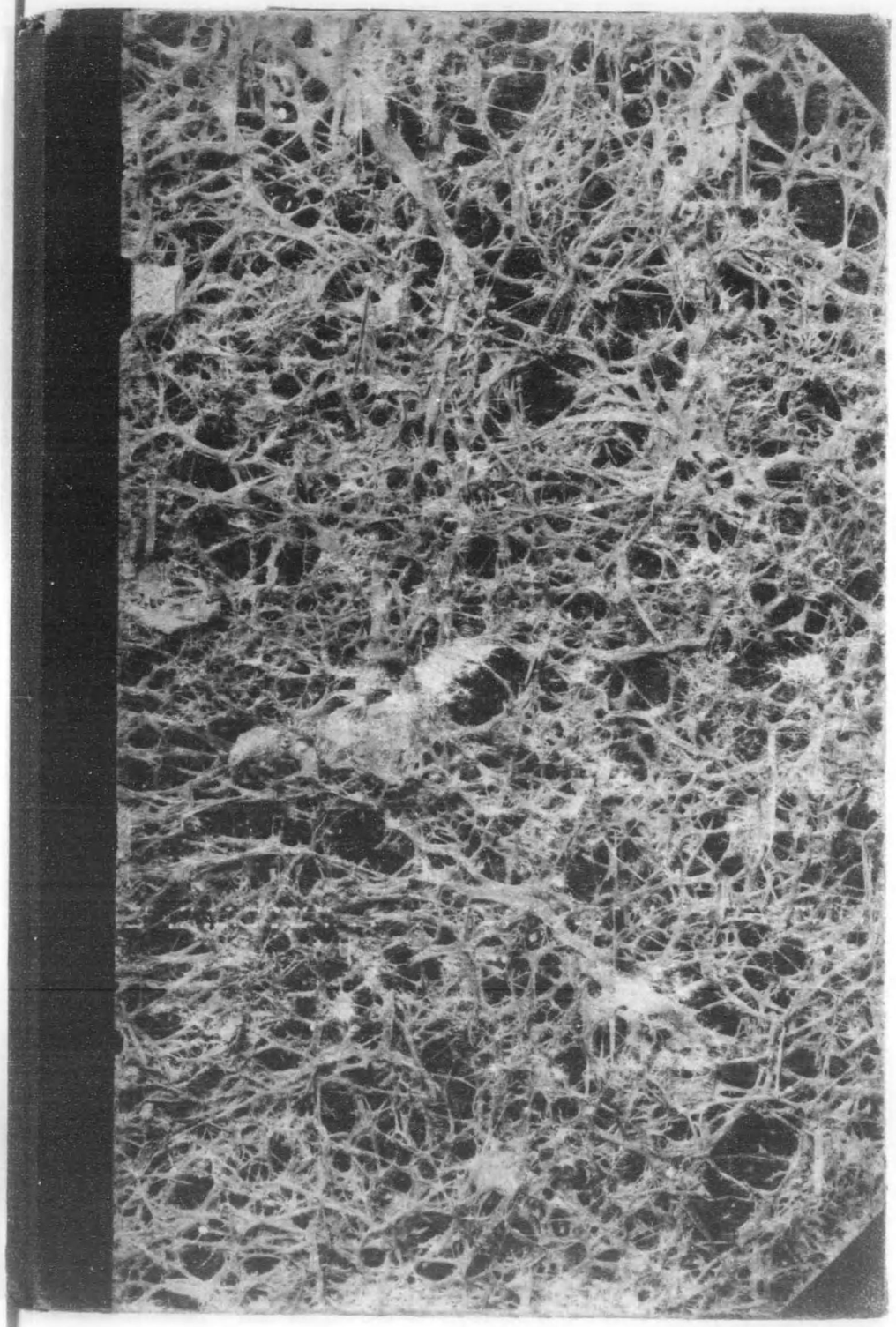
大正六年八月二十日印刷
大正六年八月廿五日發行

編輯兼發行者　金澤市弓ノ町二十八番地　戸水萬頃

印刷者　金澤市殿町九番地　宇野孝太郎

印刷所　金澤市殿町九番地　活文堂

328
527



終